

研究テーマ 西脇順三郎『Ambarvalia』研究

上越教育大学 教科・領域教育専攻
言語系コース（国語）
西本 伸一

研究の概要

1 研究の目的

詩集『Ambarvalia』は、西脇順三郎の日本語による第一詩集であり、西脇詩、そして現代詩を考える上で重要な作品であるが、これまで『Ambarvalia』のみを対象とし、その詩編全体を視野に入れた研究は未だ十分に為されているとはいえないのが現状である。

詩集『Ambarvalia』に収録された詩編をその考察の対象とし、詩編個々の考察を中心に、その背景にある詩論も視野に入れながら、西脇の初期活動及びこの詩集の特質を明らかにすることが本研究の目的である。

2 論文の構成

序 章

第一章 第一期

第一期の概観

第一節 詩論「プロファヌス」

第二節 「失樂園」における現実とイメージ

第二章 第二期

第二期の概観

第一節 「馥郁タル火夫」とイマジズム

第二節 「馥郁タル火夫」と

シュールレアリスム

第三章 第三期

第三期の概観

第一節 「ギリシア的抒情詩」における

抒情の特質

第二節 「ギリシア的抒情詩」と

第三期「近代世界」詩編

第四章

第一節 詩論の変遷

第二節 訳詩・劇詩の意味するもの

第三節 『Ambarvalia』における

現実認識とロマン性

終 章

3 研究の概要

詩集に収録された詩編をその創作時期から三期に分け、第一章から第三章でそれぞれの期の特質について考察する。第四章では、第三章までの考察を踏まえ、詩集全体に関わる問題について考察し、その特質を明らかにする。

第一章 第一期

第一期「失樂園」四編は、詩論「プロファヌス」の「超現実主義」に基づいて創作されている。西脇の現実とそこから生じる「憂鬱」な感情が詩の素材となっているが、それらは観念的な西欧の素材と組み合わせられることにより新鮮なイメージへと転化されるというイマジズムの詩となっている。それは、従来の日本語による詩の概念を根本から覆し、破壊によって新しい詩を建設する試みでもあった。

第二章 第二期

第二期の「馥郁タル火夫」は、詩全体として意味の一貫性の解釈が困難な詩であり、超現実主義の詩法による意味の無化、自我の消滅を意図した、極めて方法論的な意識のもとに創作されたものであった。メタファではな

く自立したイメージの創造をめざすという点で、イマジズムの詩であると考えられる。また、イメージを創り出すための「遠く距たったものの結合」という「超現実主義」の方法は、それを知的かつ意識的に行うという点においてシュールレアリスムとは一線を画するものであった。

第三章 第三期

「ギリシア的抒情詩」では、仮構の語り手を時間性の曖昧な虚構の空間に置き、その視覚的イメージを通してイマジスティックに感情を表現するという抒情の方法が用いられており、そこに「ギリシア的抒情詩」の新しい抒情の特質があった。その抒情も、感傷的なものではなく、「永遠性」へとつながる古代世界への憧憬であり、「ギリシア的抒情詩」におけるイメージの清心さは、このような抒情性とイメージとの関係から生じてきたものだと考えられる。西脇はモダニズム性と抒情詩人的資質とを併せ持つ詩人であり、「ギリシア的抒情詩」における、ロマン的心情とイマジズムの詩法の交錯したところに生み出された新しい抒情のあり方は、その後の西脇の詩的展開のいわば原型をなすものだといえる。

第三期「近代世界」詩編は、初期欧文詩編を元に創作されたものが多く、その創作態度には、「近代世界」の詩編でありながら、「古代世界」の「ギリシア的抒情詩」との共通性を指摘することができる。

第四章

第一期・第二期の詩編と第三期の詩編との間にある詩の性質の変化は、初期詩論に認められる詩論の変化に対応しており、それは「消滅」から絵画的イメージの「創造」へと向かうものであった。また、詩集に採録された訳詩からは、西脇の他の詩編との関わりと共に、西脇のロマン性と非感傷性への志向とを読み取ることができる。

これまでの考察から、西脇の現実認識とロマン性という二つの重要な問題を指摘することができる。西脇の現実認識とは、現実は、一括して「つまらない」とするものであり、その根底には人間存在の「淋しさ」という認識があった。第一期・第二期においては、「超現実主義」の方法による自我の消滅によりこの「淋しさ」を超克しようとしたが、第三期では原始的に感覚された絵画的イメージの創造によって、これと対峙している。また、「ギリシア的抒情詩」は、西脇の原始的感覚とロマン性が、絵画的イメージへの志向とその方法としてのイマジズムと結びついたところで成立している。

詩集『Ambarvalia』は、このような認識と方法によって成立しており、その後の西脇の創作活動の原点として重要な意味を持つ作品であると考えられる。

研修成果の活用について

国語においては、言葉を媒介にして作品世界や作者の内面に迫ることが第一義的に求められている。その際、テキストのとらえ方や解釈の仕方は理解を大きく左右する要素となる。本研究は直接授業のあり方を対象にはしていないが、国語の授業における文学作品の読解や解釈、特に多義的で曖昧な表現を特徴とする詩作品の理解に貢献するものであると考える。西脇順三郎の作品のみならず、近現代詩における表現やイメージ、現実認識について、授業で取り上げる際の基礎的なテキスト理解のあり方について、今後も研究を継続していきたい。

詩の授業は、ともすれば生徒の恣意的な読みや形式的な解釈で終わってしまう傾向にあるが、言葉の創造的機能に目を向けさせ、言語感覚を養い、新しい認識を獲得するためにも重要な役割を担うものと考えられる。そのような観点から、今後はこの研究の成果を、詩の授業に活かす実践を積み重ねていきたい。

